

宣言的知識(declarative knowledge)に重点を置いた指導法

金沢大学大学院教育学研究科英語教育専攻
石川県立鶴来高等学校 中川 賢司

1 はじめに

わたしが勤務する学校は、しつけや低学力などをはじめとした様々な問題を抱えている。その中でも特に大きな問題は、基礎学力の定着率の低さである。英語の授業においても、外国語指導助手 (ALT) を積極的に授業の中で活用するなどして、生徒の学習意欲の向上を目指している。しかし基礎学力の向上という点では、現在のところ十分な成果が上がっているとは言いがたい。もちろん ALT を活用することで、その時間の中での一時的な意欲の向上は見られるが、更なる定着にはつながらない。ゲームや歌などで、表面的には楽しい授業のように思われるが、本当に何か身に付いたかという点、疑問が残る。それではこのような状況で、教師には何ができるのだろうか。このことをわたしたち教師は自問自答を繰り返してきたが、容易に答えがみつからないのが現状である。ただ、教師の間で、今のままのただ楽しいだけの授業ではいけないという意見が強くなってきたのも事実である。つまり、ある程度の文法事項や、語彙などもしっかりと身につくような指導が、例えば ALT との楽しい授業の中でも多分に盛り込まれるべきであると言った考えである。

それではどのようにして、文法や語彙の指導がなされるべきなのだろうか。昨今の英語学習ブームの中で、文法を度外視し、会話中心の指導が行われれば、自然と実践的な英語によるコミュニケーション能力が身につくといったような、英語学習に対する安易な風潮があるような気がしてならない。極論かもしれないが、母国語と同じように第二言語である英語が身に付くと言うのである。確かに、これはもっとも理想的な習得方法であろう。しかし、それは普通の英語学習環境の中で可能なのだろうか。まず、母国語と第二言語の習得を通常の学習環境という条件で比較することがとても危険である。なんと言っても、吸収する input の量に大きな差がある。二つ目に、生活環境である。大半の子供たちは、一歩教室から足を踏み出すと、英語がなくても生活できる環境にいる。この二つの現実をしっかりと認識する必要があるのではなかろうか。つまり、自然に英語を身につけ、後から文法や語彙がついてくるといった考えではなく、ある程度、授業の中で文法や語彙の学習に重点を置く指導の方が、第二言語（ここでは英語）の習得という点では、より効果的で学力の定着につながるのではないかということである。

以上のような考えに立ち、研究に臨んだ。

2 先行研究

私が研究に臨むにあたって参考にしたのが、Keith Johnson という応用言語学者である。彼は、母国語と通常の学習環境下での第二言語の習得は区別されるべきだと主張した。そして、第二言語の習得過程を declarative knowledge (宣言的知識) を習得する過程と procedural knowledge (処理的知識) を習得する二つの過程に区別した。そして、通常の環境での第二言語の習得に於いては、宣言的知識を重視した指導を重視すべきだとした。それでは宣言的知識、処理的知識とはどんなものなのだろうか。Johnson によると、宣言的知識とはいわゆる文法や語彙の知識であり、処理的知識とは、宣言的知識を運用に移すことができる段階に達したものである。母国語の習得においては、宣言的知識の習得に意識を置かなくても、膨大な input を通して、自然に処理的知識が身につく、その結果、後

から宣言的知識がついてくるのである。一方、第二言語の習得においては、十分な input を受ける環境にない場合、言語の基礎である宣言的知識の習得に重点が置かれず、言語は習得の段階まで達しないというのである。Johnson の言語習得過程を矢印で表すと、次のようになる。

母国語： 处理的知識 → 宣言的知識
第二言語： 宣言的知識 → 处理的知識

彼は、特に臨界期を過ぎた学習者の指導には、上記のことが重要であると主張した。

3 実験

1 内容

私が勤務する 1 年生の二つのクラスで次のような実験を行った。

クラス A 处理的知識への発展を意識しながら、宣言的知識の習得に重点を置いた指導
このクラスの指導では、文法や語彙の説明の時間も、演習の合間に十分とった。

クラス B 口頭での演習を中心に、宣言的知識を介さずに处理的知識の習得に重点を置いた指導
このクラスの指導では、文法や語彙の説明は一切行わず、口頭での演習が大半を占めた。

2 文法項目

実験に際し、代名詞を学習題材にした。その理由は、代名詞は文法項目の中でも最も基本的なもので、運用に於いても頻度が高いからである。その他の文法事項も考えたが、難しいものである場合、プレテストやテストで十分な量の結果得られない可能性があるので、最も基礎的で、比較的生徒に馴染みの感じられる代名詞を選択した。

3 学習表現

自己紹介および家族紹介の表現を選択した。その理由は代名詞と同様に、比較的容易で、しかも代名詞の使用の頻度が高いからである。

4 対象生徒

クラス A (37 名) は普通科の普通コース、クラス B (40 名) はスポーツ科学コースである。

5 プレテストおよび実験後テスト

4 月の入学後すぐに、実験前に生徒の英語力を知るために、プレテストを行った。内容次のようなものである。

問 1 代名詞を実際にかかせるもの。 問 3 代名詞を含んだ語群を並べ替えるもの
問 2 正確な代名詞を選ぶもの。 問 4 自己紹介を英語で書く。

実験後テストの内容は上記とほとんど同じであるが、問 2 については問題量を増やし、問 4 については学習項目であった、自己紹介および家族紹介を英語で書くというものにした。また、口頭での表現力の習得度合いを比較するため、インタビューテストも行った。

6 結果

1 平均の比較

(プレテスト)

	問1(31)	問2(62)	問3(27)	問4(15)	合計(135)
クラス A	12,1(39%)	28,0(45%)	6,4(24%)	3,3(22%)	49,8(36%)
	36人	36人	36人	36人	36人

	問1	問2	問3	問4	合計
クラス B	15,3(49%)	29,8(48%)	8,0(30%)	1,9(26%)	57,1(42%)
	40人	40人	40人	40人	40人

(テスト)

	問1(31)	問2(105)	問3(27)	問4(45)	合計(208)
クラス A	17,5(56%)	53,9(51%)	11,8(45%)	18,5(42%)	105,3(51%)
	28人	30人	29人	30人	28人

	問1	問2	問3	問4	合計
クラス B	16,3(52%)	53,7(51%)	11,4(42%)	16,0(35%)	97,2(47%)
	40人	40人	40人	40人	40人

2 プレテスト上位20位の比較 (表1)

3 インタビューテストの結果 (表2)

7 分析

上記の結果から、より適切な文法、語彙の説明を交えた指導を受けたクラスAの方が、プレテストから実験後テストの成績の伸び率が高いことが読み取れる。このことは、クラスAの生徒のほうが学習事項の定着が高いことを示している。

問1、問2、問3については、クラスAの伸び率がかなり上がることはある程度予測がついた。なぜなら、このクラスでは、クラスBより、多くの文法的説明を受けているのであるから、それに対する設問である問1、問2、問3の伸び率が高いのは自然なことである。しかしここで特筆すべきは、問4とインタビューテストの結果の伸び率である。この両方の設問の共通点は、いずれも、英文や会話で自己を表現するものである。本来なら口頭による訓練を多く受けたクラスBの生徒の方が伸び率が高いことが想定されるが、実際は、クラスAの方が伸び率が高くなっている。

以上のことから、ある程度、文法や語彙のポイントをしっかり押さえた方が、口頭の演習のみに頼った授業より、学力が定着しやすいと言える。

8 今後の課題および研修成果の活用

これからの課題は、宣言的知識の確立の方法である。日本の英語教育の現場では長い間、宣言的知識（文法や語彙）の指導は、处理的知識につながらない形でなされてきた。つまり、文法や読解の授業は、日本語による説明だけで、それを处理的な知識に発展させ

ることを想定していないものであった。もちろん、宣言的知識を处理的知識に発展させるかどうかは、個人のモチベーションにかかっていると言っても過言ではない。しかし、宣言的知識を处理的知識にできるだけスムーズに移行できるようにするのは、英語教師の役割である。

今回は代名詞という比較的教えやすい文法項目であり、指導もやりやすかった。その後も、進行形や、不定詞なども处理的知識に発展させることを意識しながらやっている。正直なところ、文法項目のレベルが上がってくればくるだけ、どうしても、处理的知識の意識が薄れてくる。このあたりがこれからの課題である。これからも、実践で使える文法の指導をまだまだ勉強したい。